活動とコミュニケーション：活動理論の新定義

Activity and Communication：new definition of activity theory

高取憲一郎　TAKATORI　Kenichiro（教授　発達科学講座）

キーワード：活動，コミュニケーション，ヴィゴツキー，ピアジェ
keyword: activity, communication, Vygotsky, Piaget

1）わが国の人間論をめぐる動向

最近の，あるいはより正確にはここ40年間ぐらいの時間スパン（1970年から2010年）において，子どもやおとなの状況をめぐるわが国の論調がどういう方向へ向かって変化してきたのか，ということから話をはじめたいと思います。その際，社会の状況あるいは社会のあり方が，人間の状況あるいは人間のあり方に大きな影響を与えるという立場に立つ者として，それを，単に人間の側の変化だけに限定してとらえるのでなくて，社会の変化も同時に見るという視点から概観してみたいと思います。それゆえに，まず，社会と個人の変化を並列させながら，この間の変化について触れてみたいと思います。

まず社会の系列においては，私が高校生から大学生の頃は，日本社会を表す言葉として「一億総中流」ということばがマスコミとかニュースなどの前面に出ていたように思います。事実，豊かではなかったけれども，貧しくて困るという人々の層もそんなに多くはなかったような気がします。ただ，この私の印象は，児童期から青年期にかけてのものであってきわめて一面的であり，科学的・客観的に見れば間違っているかもしれません。

その後，日本の経済力が成長するなかで，物質的な豊かさよりも精神的な豊かさが重要であって日本はそれが欠けているというような言説が世の中をにぎわすようになりました。実は，私は1988年から1989年にかけての1年間，ハンガリーの首都ブダペストにあったハンガリー科学アカデミー社会心理学研究所に日本学術振興会の特定国派遣研究者として滞在していました。当時の私の住居はドナウ川の河畔から500メートルぐらいのところにありましたが，そこからブダペスト市の中心街にある研究所まで歩いて通っていました。その頃，ハンガリー語の習得のために通っていた語学学校で，いろいろの国から来ている人たちと知り合いになりましたが，イタリアから来ていたある学生が，日本人は働いてばかりいて人生の楽しみ方を知らない，エコノミックアニマルだという批判をしました。たしかに，当時は，ソニーとかトヨタというブランド名が世界を席巻していた時代でありました。私などは，特に豊かな暮らしをしていたという思いはまったくなかったのですが，外国の人たちの視線から見れば，日本は豊かな黄金の国に見えるのかという感を抱きました。

その日本が，最近の20年ぐらいの間に，「一億総中流社会」から貧富の格差がどんどん拡がっていく「格差社会」になっていきました。それとともに，社会を表す言説も「希望格差」とか「教育格差」，「学力格差」などが現れて来ました。さらに，ここ最近では，格差社会を通り越して「貧困」という言葉が前面に出てきています。この間の，以上のような日本社会の変化は，一気に生じたという感が強くて，またたく間に日本は貧困社会に突入していったという思いを強くしています。私は，河上肇博士の『貧乏物語』（岩波書店，1947年），『第二貧乏物語』（新日本出版社，2009年）という本を座右の書としていますが，その中に描かれている1917年（大正6年）のわが国の状況が現代の状況とほとんど違いがないことに驚かされます。また，1917年というのはロシア革命の年でもあります。

日本社会が貧困社会として描かれていく中で，「子どもの貧困」という新しい言葉も生まれています。私は，この「子どもの貧困」という言葉はなにげなく聴いてはいたのですが，特に関心を持ち出したのは，雑誌『経済』の2008年10月号の座談会「子どもの貧困と現代社会」に登場している川崎二三彦氏を通じてです。川崎さんは学生時代からの知り合いですが，近年，児童虐待問題の専門家として頭角を現してきた人です。雑誌『経済』はその翌年も「子どもの貧困と格差」という特集を組んでいます（2009年12月号）。「子どもの貧困」問題については次の二つの文献を参考資料としてあげておきます。

資料 1　山野良一「日本政府が認めたがらないこの国の貧困と子どもの未来」『週刊東洋経済』2008 年 10 月 25 日号より抜粋

アメリカにおける貧困問題とは、銃犯罪の起きる割合の差であり、麻薬事件の発生率の差であり、ティーンの妊娠率の差であり、児童虐待によって傷ついたり死んでしまう子どもたちの数の差でもあるのだ。つまり，アメリカ社会の病弊すべてが貧困問題と直結しているとさえ言える。

たとえば，私がソーシャルワーカーのインターンとして働いていたセントルイスでは、貧困地域と豊かな地域では、児童虐待の発生率は最大で250倍もの差を示す。貧困な地域では年間1000人当たり50人の子どもが児童虐待の被害児となり、豊かな地域では、わずかに0.2人にしかすぎない。全国規模の調査は、さらに衝撃的な事実を示す。児童虐待で死んだ子どもの大半が、全米の平均的収入の2分の1しか得ていない貧困家庭の中で生活していたことがわかる。

実は、こうした児童虐待と経済的な格差との密接な結びつきは、日本のいくつかの調査においてもすでに見ることができる。たとえば、東京都の調査によれば、児童虐待につながった家庭の状況（複数回答）は、独り親家庭（全体の 31.8%）、経済的困難（同 30.8%）が多いとされている。（後略）

資料 2　阿部彩『子どもの貧困：日本の不公平を考える』岩波新書，2008 年

子どもの貧困，虐待，低学力の背景には，社会的・経済的土台があることを明らかにしている。特に，母子世帯の抱える困難さに関しては，ページの多くを割いて論じている。著者が紹介しているイギリスの貧困研究者ピーター・タウンゼントの「相対的剥奪」（relative deprivation）という概念は，「人々が社会で通常手に入れることができる栄養，衣服，住宅，住居設備，就労，環境面や地理的な条件についての物的な標準にこと欠いていたり，一般に経験されているか享受されている雇用，職業，教育，レクリエーション，家族での活動，社会活動や社会関係に参加できない，ないしはアクセスできない」状態であるが，これは，ちょうどヘップの初期経験の剥奪（要因 4 の剥奪）という部分とも重なるものであり興味深い。また，著者の言う「剥奪」とは，強制された欠如であるという指摘も重要である。

ところが，ごく最近，私は気づいたのですが，格差の拡大とか貧困で傷ついた日本社会を何とか回復方向へと持っていこうとする論調がここ 1，2 年の間に出回るようになっています。これは，心理学者ピアジェの均衡論で考えれば，きわめて興味深いのですが，一億総中流で均衡の取れていた日本社会が格差とか貧困とかで不均衡の状態になっているのが，ふたたび均衡をとりもどそうとして日本社会そのものの中に自立的な動きが現れてきたともいえるのです。この流れは，最近つとに言及されている，「無縁社会」を「有縁社会」へと回復させる試みでもあるわけです。格差とか貧困が大きくなるにしたがって，人と人との絆が断絶していくという傾向が，日々あらわになっていくからです。その失われつつある絆をつなぎ合わせていこうという動きが社会の中に現れてきているということです。

そのような流れを示す文献としては，二つあげておきます。神野直彦『「分かち合い」の経済学』岩波新書（2010 年），　白波瀬佐和子『生き方の不平等：お互いさまの社会に向けて』岩波新書（2010 年）です。

また，このような論調と軌を一にするかのごとくにＮＨＫテレビなどが一軒の家を複数の人が共同で借りる「ハウスシェア」とか，複数の家族が共同生活を営む「コレクティブハウス」などのトピックスを取り上げるようになりました。明らかに，社会をめぐる状況は，格差･貧困・無縁社会から協同へ，あるいは癒しの社会へと変化していっているようには見えます。

次に，個人のレベルにおける変化を見てみましょう。この間の子どもをめぐる変化というのは，大きく言えば，身体の異常が取り上げられた時代から，行動と認知の異常が取り上げられた時代を経て，言語とコミュニケーションの異常が喧伝されている現代という時代への変化であると思います。さらに，それがごく最近では，言語とコミュニケーションを鍛えて，お互いの絆やコミュニケーションをとりもどす時代へという流れの中にあると言ってもいいでしょう。そのような動向をよく表しているものとして，クローズアップ現代で 2009 年 11 月 25 日に放映された『言語力を鍛える』があります。その中で，小学生から大学生までの言語力，およびコミュニケーション力を鍛える取組みが紹介されています。

それではまず，子どもの身体の異常が取り上げられた時代の話をしましょう。これは，私個人の歴史の上でいうならば，ちょうど，大学院生の頃から，この鳥取大学地域学部の前身である鳥取大学教育学部に着任した時期に重なります。その頃の大学院生の生活というのは，今とはかなり異なっていたと思いますが，院生という存在は「養成されつつある研究者」であるという規定のもとに，かなり自由に（少なくとも私の

場合はの話ですが）のびのびと院生としての生活が送れた時代であったと思います。研究のほうも，業績主義とは縁のない，蛸壺的な研究とも縁のない，全体的な視野をもったスケールの大きな研究者を目指す気風がまだ残っていた時代でした。私は，戸坂潤の目指した「エンサイクロペディスト」（百科全書派）としての研究者を目指していました。ですから，専門の心理学ばかりではなく，哲学や社会学，教育学，経済学，文学，歴史学などを勉強することはごく当然の成り行きでした。当時の，日本科学者会議京都大学文学部分会は，そのような志向性を持った院生たちが多数集まっていて，歴史的に見ても，最高の輝きを放っていた時代のうちの一つといっても過言ではないと思います。一人前の研究者として巣立っていった彼ら，彼女たちは，その後各分野で有力な研究者として成長しました。ですから，私がその頃，次のような正木健雄さんの調査を知っていたのもまったく偶然ではありません。

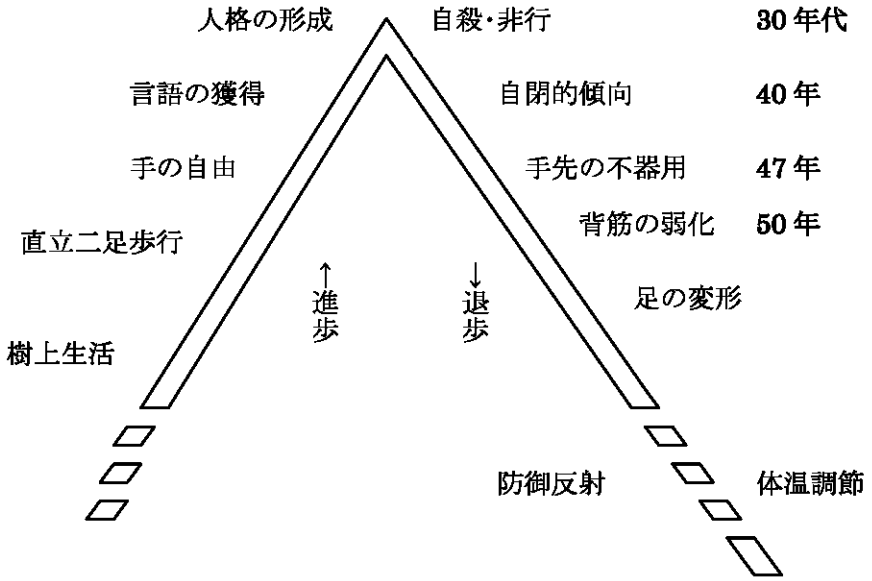
日本体育大学の正木健雄さんたちは，NHKと協力して日本の子どもたちの体力調査を始めました。この調査のきっかけは，私の記憶によれば，正木先生たちが共同研究をしていた岐阜県の山村部の中学校で，年々，子どもたちの体力，特に懸垂の力が落ちていることに気づき，調査を始めたということだったと思います。全国の，幼稚園から高校までの養護教諭にアンケートに回答してもらった結果を集計してみると次のような身体の異常な状況が現れてきたというのです。

資料 3　正木健雄ほか『子どものからだは蝕まれている』柏樹社 1979 年

①つまづいたときなどとっさに手が出ず，顔や頭にケガをする
②まばたきが鈍く，目にゴミや虫が入る
③ちょっとしたことで骨折する
④いつ骨折したかわからないケースが目立つ
⑤朝礼のときなどバタバタ倒れる
⑥高血圧や動脈硬化がめだつ
⑦腰痛の訴えがめだつ
⑧土踏まずの形成が遅れ，遠足などで長く歩けない
⑨バランスをくずしたとき，踏みとどまれない
⑩棒のぼりなど足裏を使ってのぼれない
⑪神経性胃潰瘍などがめだつ
⑫肩こりを訴えるのがめだつ
⑬背筋のおかしい子が最近目立つ
⑭朝からあくびをする子がめだつ
⑮大脳の興奮水準が低く，目がトロンとしているのがめだつ
⑯ものごとに関心を示さずボーッとしている

この結果は，NHKスペシャルで放映されて全国的に大きな反響をひきおこしました。私が覚えているのは，この結果を受けて，各地でそれを克服する取組みがさまざまに行われたということです。たとえば，今から思えば笑い話になるかもわかりませんが，子どもに土踏まずを形成させるために，下駄やぞうりをはかせようとか，背筋力を鍛えるために学校の掃除の時間に廊下の雑巾がけをやらせようとか，本気で提案されていたことです。その効果が果たしてあったのかどうか，その後日談は聴いていません。これらの動きは，教育委員会のルートばかりではなく，教職員組合のルートでも，アンケート活動や，克服の取組みが行われていました。しかし，その後，これらの取組みはいつの間にかわが国の教育界から消えていきました。この，いつの間にか消えていったということも，私にとっては，たいへん不思議に思われる現象です。

正木先生たちは，彼らの見解を一つの図(資料 4)にまとめています。この図から読み取れることは，正木先生たちのグループは，人間の進化は労働に依拠しているという理論に基づいているということです。すなわち，樹上生活をしていいたわれわれの祖先であるサルが，地上へ降りてきて直立二足歩行を始める。そのことにより前足である手の自由を獲得し，さらに言語を獲得して人格を形成してきた。それに反して，最近になって，人格の否定である自殺や非行の増加，言語の獲得の否定である自閉的傾向の増加，手の自由の否定である手先の不器用，直立二足歩行の否定である背筋の弱化と足の変形，さらに，防御反射や体温調節という基本的な生物的機能の衰退，という人類の退化の方向へと状況が進行しているという図式です。



資料4　正木健雄・野口三千三(編)『子どものからだは蝕まれている』柏樹社，1979年より

この説明図を見ると，私の場合はエンゲルスの『自然の弁証法』の中の有名な論文「サルが人間になるにあたっての手（あるいは労働）の役割」を思い出すのですが，それは，当時の日本の学問状況とも合致していて，労働によって人間は作られた，あるいは労働によって人類は発生したという史的唯物論的解釈が広く行きわたっていたという証拠でもあるのです。

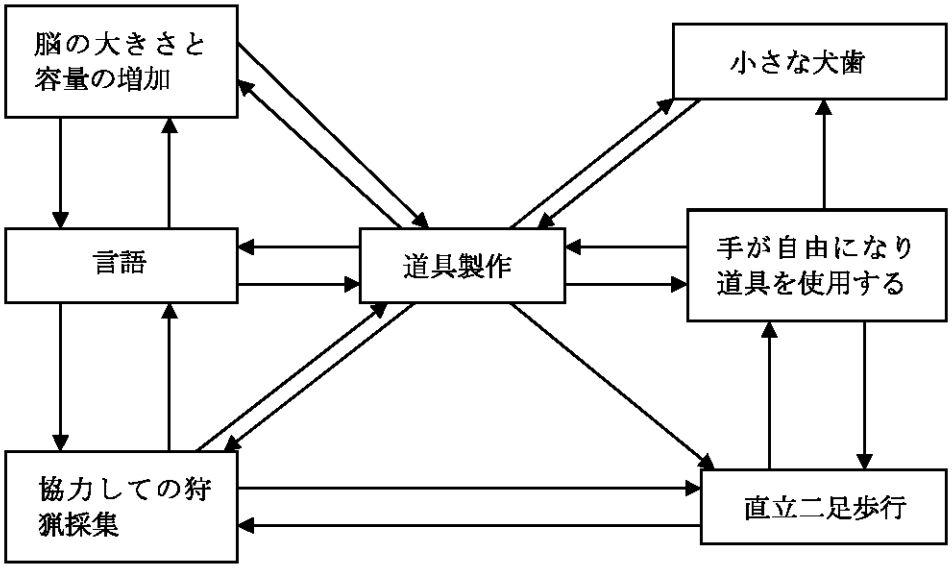
ところで，正木先生たちが依拠していた労働によるヒト化（ホミニゼイション）のプロセスを統合的に描いた図があります。それは，英国・グラスゴー大学のウルフソンという人の著書（Woolfson, C. The labour theory of culture: A re-examination of Engels's theory of human origins. London: RKP, 1982）の中にある図です。この本については，私は少なからず思い入れがあります。どういうことかというと，このウルフソンという人を知るきっかけになったのは，芝田進午先生が主催しておられた社会科学研究セミナーという民間研究組織があったのですが，そこが出している『マルクス主義研究年報』という雑誌の世界各国のマルクス主義関連の雑誌の文献紹介の中に，ウルフソンの論文を見つけたのです。

ここで，少し脱線して芝田進午先生について触れておけば，先生が30歳ぐらいのときに執筆されたという『人間性と人格の理論』（青木書店，1961年）という著書は，私のいわばバイブル的な本です。私が，ちょうど大学の2年生の頃，燃え盛る大学紛争の真っ只中で，大学の授業は行われず，私は心理学や社会学の学生や院生たちと，まさに，この芝田先生の本をテキストに学習会を，しかも大学の外の場所で半年ほどやっていました。その後，私は芝田先生とは直接お会いしたことはないのですが，いろいろと論文の執筆を勧めていただいたり，文通で指導していただいたりして，わたしは芝田進午先生を勝手に恩師であると思っています。わたしが，ヴィゴツキー心理学とピアジェ心理学の統合というモデルに思い至ったのも，『人間性と人格の理論』の中の，労働の技術的過程と組織的過程という芝田先生からの示唆に負っているところが大きいのです。残念ながら，芝田先生は早くお亡くなりになりましたが，その追悼記念論文集にわたしも末席に加わらせていただいているしだいです（芝田進午さんを偲ぶ会編『芝田進午の世界：核・バイオ時代の哲学を求めて』桐書房，2002年）。この記念論文集で知ったのですが，鳥取大学地域学部に保育学の教授でおられた村山祐一先生も芝田先生の弟子であり，また，芸能レポーターとして名をはせた梨本勝さんも芝田ゼミの出身であったということを最近知りました。

脱線が長くなりました，ウルフソンの話に戻ります。私が

見つけた彼の論文は英国のマルクス主義の雑誌『マルクシズム・トゥデイ』に掲載されていたCulture, language and the human personality. Marxism Today, vol.21,no.8,1977, pp.229-40. です。私は，この論文を読んで，ウルフソンが社会学の研究者であるが，ヴィゴツキーの心理学にもきわめてよく通じていることを知りました。私は，その論文に載っている住所に，別の論文があれば送ってくれるように頼みました。すると，彼からは，先に紹介したペーパーバック版の本が送られてきたのです。その中に同封してあったグラスゴー大学の用箋にはアダム・スミスが作った大学という一文が印刷されていて，この大学の歴史を感じもし，また，歴史上の人物に思いがけないところで出会ったような感動を覚えました。

さて，ウルフソンはヒト化（ホミニゼーション）のプロセスを示す図を，人類学者のリーキーとレヴィンの著書（Leakey, R.E. & Lewin, R. Origins, London, Macdonald & Jane's, 1977）から借りてきたことをことわった上で，以下のように表しています（資料5）。



資料5　ウルフソンの労働を媒介としたヒト化プロセスの相関図

われわれの祖先が樹上から平原へと降りてきて直立二足歩行を始めたことが，今日のわれわれをつくっているという事実は一般に認められていることです。直立二足歩行をするようになって，前足である手の自由を獲得し，手を使って道具の製作ができるようになった。その道具の製作の過程で，制作方法とか情報交換の必要に迫られて言語をわれわれの祖先は獲得してきた。また，言語の獲得についてはベトナム人の哲学者チャン・デュク・タオが『言語と意識の起源』（岩波書店，1979年）の中で主張しているように，われわれの祖先たちが狩猟をしているときに，追いかけていた獲物の動物が山の角を曲がったときに先頭のハンターが獲物を指差し声を上げたという，狩猟中の協力関係に求める見解も有名です。さらに，火を発見したわれわれの祖先が動物の肉を火にあぶって食べるようになった結果として，タンパク質の効率的な摂取が可能となり，それが脳の容量の拡大につながり，知能が進展する結果となった。同時に，道具のおかげで食べ物を歯を使って噛み切る必要がなくなり，犬歯が小さくなっていった。この図はこのようなヒト化のプロセスを表しています。

ただ，このウルフソンの図を見ても明らかにわかるように，図の中心には道具製作が置かれています。これは，やはり，先に触れたエンゲルスの図式にそって，ヒトになるに当たっての労働の役割を念頭においた図式になっています。この当時は，これが定番だったと思います。わが国においてこのような伝統的な見解が徐々に変化してきたのは，尾関周二さんが『言語と人間』（大月書店，1983年）のなかで，コミュニケーションの重要性を主張した以降のことではないでしょうか。

さて，以上のようなヒトになる際の労働の役割という視点に立って，正木先生たちが警鐘を鳴らし続けていた身体の変化という問題がいつの間にか一段落した後に現れたのが，不登校や校内暴力，いじめ，さらに学習障害（ＬＤ）や注意欠陥多動性障害（ＡＤＨＤ）です。これらは，ひとまとめにして，行動・認知の変化と括ることができます。さらに進んで，

最近では，言語やコミュニケーション，対人関係の異常としてまとめることのできるディスレクシア(読字障害)とかアスペルガー症候群といわれる現象が顕著になってきました。私は，ここでは，コミュニケーションや対人関係の障害である高機能自閉症やアスペルガーの子どもたちの理解と指導と援助を取り上げている二つの文献に注目しようと思います。この二つの論文は，いずれもコミュニケーションの不足を集団として補ったり，あるいは相互理解の可能な信頼できる他者を作る試みによって補ったりしているところに共通点があります（資料6，7)。

資料6　別府哲「思春期の高機能自閉症の子どもの理解と指導」日本の科学者，2006年2月号

高機能自閉症児・者の感覚は独特　例：蛍光灯のちらつきが知覚されてイライラする。
他者の心の理解，場の状況の理解が困難。
他者と異なることから来る孤独感にさいなまれる，自分の世界を他者と共有できない。
上記のことから来る二次障害（不登校，抑うつ，摂食障害など）をひきおこす場合がある。
高機能自閉症児・者の感覚や感じ方の世界を共有してくれる，あるいは共有しようとしてくれる他者を作ることが重要，居場所を感じられる学級集団作りが大事である。
高機能自閉症児を周りの子どもが受けとめていくためには，高機能自閉症児自身がなぜそういう行動をしてしまうのか，その思いを，個別･具体的に教師が伝えることが重要。

資料7　楠凡之「通常学級に在籍するアスペルガー障害の子どもへの理解と援助」日本の科学者，2006年，2月号

男児（小３）の例：ちょっとした刺激や気配に反応しやすく，前後の脈絡を解せず，自分の思い込みで衝動的に行動してしまい，トラブルを起こす。自分の気に入らないことをされたり，言われたりするとすぐに興奮して，蹴ったり叩いたり，物を投げたりする。人間関係作りが困難で，ちょっかいを出して関係を作ろうとするため，トラブルになることが多く，他の子どもたちからは避けられている。
アスペルガー障害の子どもが在籍する通常学級における指導のポイントはアスペルガー障害の子どもの独自の感覚世界，世界の見え方を他の子どもが理解できるように援助すること。集団内のトラブルの丁寧な読みひらき（トラブルの生じたズレ，トラブルの意味の解釈などを黒板に書きながら）を通じての相互理解の形成。アスペルガー障害の子どもが自己コントロールできるようにするためには安心，信頼できる他者との関係を作ること。アスペルガー障害の子どもを理解し，擁護し，サポートしていけるリーダーを育てること。

このような身体の変化から，行動･認知の変化を経て，言語とコミュニケーションの変化へと子どもが推移してきている状況は，分かち合いとかお互いさまの社会，つながりやコミュニケーションをとりもどして社会の絆を作り直し新たな社会を構築していこうという動きと呼応しているように，私には思えるのです。さらに，上に述べたような人間と社会に関する動向は，もともと人間に生得的に備わっている心を作るメカニズムと深いところで触れ合っているようにも思えます。これとの関連では，次の資料8のブラザースの見解を参照してみてください。

資料8　ブラザース『フライデーの足跡：社会はいかにして人間の心を形成するか』(Brothers,L. Friday's footprint : how society shapes the human mind. Oxford University Press,1997)

英国の脳研究者であるブラザースは脳の研究を進める中で，人間の心は脳だけでは説明できないことに気づいた。この著書の題名のフライデーの足跡というのは，デュフォーの『ロビンソン・クルーソー漂流記』において，自分が長年住んできた島は無人島であると思い込んでいたロビンソン・クルーソーが，ある朝海岸に行ってみると人間の足跡（この足跡こそがフライデーという少年の足跡であった）があることを発見して愕然としたことに由来している。それと同じように，脳研究者たちは心の形成には他者の存在が必要であることに，今まであまりにも気づかなさすぎたということを暗示している。ブラザースはこの本の中で，人間の脳は進化の産物として，社会的な脳となっており，脳のある部位（大脳辺縁系および扁桃核）がその生得的な社会性を司っていること，そしてその社会性は他者とのコミュニケーションの過程により開発され，人間の心として展開していくことを主張している。

(2) 社会と知能の構築：言語とコミュニケーションを媒介として

日本社会はこの間，格差の拡大や貧困の増大によりますます混迷の度を加えています。さらに，2011 年 3 月 11 日の東北大震災，大津波，福島原発の危機によって，日本人の脳裏に小松左京の『日本沈没』というイメージがダブったのではないでしょうか。また，それ以後のわが国の対応を見聞していると，前福島県知事であった佐藤栄佐久氏が述べたように（2011 年 10 月 15 日に札幌大学で開催された 2011 年度唯物論研究協会年次大会での記念講演），3-11 以降のわが国のありようは，政治家の劣化と官僚の劣化を国民の前にあらわにしたのではないでしょうか。ただ，その半面で，全国各地から被災地･被災住民への多額の募金の集中，ボランティア希望者の増加など日本全体の統一感も一時的には高まったように思えます。雨降って地固まるのことわざのごとくに社会の絆がこれを契機に取り戻せたらいいのですが，将来についてはなんとも予測しがたいところです。

それはさておき，新聞，テレビ番組を毎日チェックしながら日本のマスコミを日々観察している一国民として，この間の最も衝撃的な番組は 2010 年 1 月 31 日放映のＮＨＫスペシャル『無縁社会～無縁死 3 万 2 千人の衝撃』ではなかったでしょうか。「行旅死亡人」とか「無縁墓」，「直葬」「親族がいながら引き取り手のない死者」とか，目新しい言葉が次々と出てきて，無縁社会もここまで進行しているのかという思いを新たにさせられたところです。

しかし，この無縁社会のありようを説得的に描いたものとしては 2009 年 2 月 1 日にＮＨＫのＥＴＶ特集『作家・辺見庸　しのびよる破局の中で』に勝るものはないと思います。この内容は『しのびよる破局：生体の悲鳴が聞こえるか』（大月書店，2009 年，後に角川文庫 2010 年）として書物になっています。

資料 9　ＥＴＶ特集『作家・辺見庸　しのびよる破局の中で』（2009 年 2 月 1 日，ＮＨＫ教育テレビ）

辺見は，その中でまず冒頭に，2008 年 6 月 4 日に秋葉原で起こった自動車工場で働く非正規派遣社員がレンタカーで歩行者天国へ突っ込み，7 人が死亡，10 人が重軽傷を負った事件（いわゆる秋葉原事件）をとりあげた。彼は，この事件を経済恐慌にととどまらない，もっと大きな恐慌，それは心的恐慌とでもいうべきものの前触れととらえている。別の角度から見れば，それは，この間の構造改革の中で現れてきた，金儲け至上主義，負け組みは個人の責任であるという風潮の蔓延，派遣労働者を冷酷非情にも簡単にくびにして路上に放り出すというような労働者をモノとしてしか見ない経営者の姿勢，等々の人間の倫理や価値の喪失とでも呼びうるようなモラルの危機でもある。彼の言葉を借りれば，資本の関わる原発悪があちこちに転移してヒトの心の中に広がり，手に負えない状態になっている。これを，新型インフルエンザなどが感染する様に模してパンデミック(感染爆発)な状況と呼んでいる。現代日本において，人間が生きていく意味というようなモラルの根源の部分が喪失してきていることを辺見は鋭く指摘したのだ。

さらに，彼は，このような状況をカミュの小説『ペスト』(1947 年)を引用しながら警告を発している。小説『ペスト』は，アルジェリアのオランという町で，ペストが 10 ヶ月にわたって蔓延していった様子を描いたものである。最初は，ネズミの死骸が町のあちこちで発見されるという小さな異変から始まった。マスコミの過小評価と関係者の楽天主義のために、ペストとは気づかず見過ごされた。これが結果的には手遅れを生む。ネズミの次に，今度は人間が大量に死んでいくことになった。現代の日本はまさにこの状況であり，将来に悪いことが起きるかもしれないのではなく，もうすでに今起きている。テレビでは年越し派遣村の様子や，派遣・非正規労働者の解雇を連日のように報道する一方で，同じテレビが大食い競争やグルメ番組をやっている。いわば，マスコミが社会の現実を国民の目から覆い隠す役割を果たしている。このように，現代日本は正気と狂気とが重層している社会である。これが，現代日本に存在する「無意識の荒(すさ)み」の発生源となっている，と辺見は主張する。

秋葉原事件は，このようなすさまじい社会に生きざるを得ない人間の発作のような生体反応であり，現代社会が人間に合わないということを示している。人間には，金儲けとは異なる迂遠な時間と空間が必要である。しかし現状は，誠実さとか優しさ，愛などの人間的モラルさえも資本に簒奪されてしまっている。それゆえに，資本に対する闘いを抜きにしては人間の回復は見込めない。

辺見ほど深い，構造的な洞察には至らないものの，この間，新聞・テレビのなかで，「キレる」という現象が取り上げられたのも特徴的でした。テレビではＮＨＫがクローズアップ現代で，子どもと大人のキレる現象を 2006 年と 2007 年に放映しています。

資料 10　クローズアップ現代「キレる子防ぐ最新脳科学」2006 年 5 月 10 日（30 分）
この放送の中では，「キレる」というのは，喜怒哀楽の感情を適切にコントロールできないことであるとして，感情の健全な発生と，感情の適度な抑制を図るにはどうしたらよいのかという点をとりあげている。
その際，近年の脳科学の研究成果により，感情の発生には大脳辺縁系の扁桃体が，また感情の抑制には前頭前野が関係していることがわかっている。扁桃体と前頭前野はいわば感情のアクセル役とブレーキ役を果たしている。この二つが健全に成長するためには，身近な人たち(親，友達，先生など)との親密なコミュニケーションが必要であることを強調している。コメンテーターとして登場した脳科学者の小泉英明氏は，脳が遺伝子によってばかりではなく環境によってかなりの部分が作りこまれるということを示唆して，番組の中で紹介された保育園での「じゃれつき遊び」の実践とか，少年院での「人間関係を作る教育プログラム」などは，脳科学から見てもきわめて科学的に意味のある取組みであるとコメントしている。

資料 11　クローズアップ現代「キレる大人出現の謎」2007 年 9 月 3 日（25 分）
平成 10 年から平成 18 年にかけてキレる大人の数は 10 倍に増加。30 代から 50 代がもっとも多い。電車の中や，病院でキレる大人が急増。精神的に追い込まれた状況でキレる。キレると鬱は裏表の関係にある。それが，他人に対しては攻撃的に，自分に対しては自殺という形で現れる。

また，新聞では朝日新聞が 2007 年 11 月 16 日～18 日に連載記事を掲載しました。

資料 12　「キレる大人たち」朝日新聞 2007 年 11 月 16，17，18 日に連載
駅員を殴った男：「以前はもっと仕事があった。景気が悪く，心が荒れていた。」
岡山県のある総合病院：看護師におこなったアンケート調査では，1 割の看護師が患者から暴力を受けたことがある。
ＪＲ，大手私鉄，都営地下鉄では，社員や職員への暴力行為は，04 年以降，554 件，708 件，665 件と高水準。加害者の年齢は 30 代以上が 8 割を超える。
武藤清栄東京メンタルヘルス・アカデミー所長：「今の職場はかなり抑圧され，一種のあきらめムードがただよっている感じがする。職場でためた不満を，地域や公共の場で爆発させているのではないか。」
神奈川県の女性経営者：「ちょうどビジネス拡大の時期で，ストレスが強かった。でも，部下には嫌われたくないという思いが強く，ミスを注意できなかった。そんなことがたまり，知らない人に対してキレていた。」
篠原菊紀諏訪東京理科大教授：「昔は，地域社会のつながりが高齢者のキレやすさをカバーしていた。しかし，今はそれが崩壊してきた。」
評論家宮崎哲弥：「今の中高年は，携帯やネットを使いこなす若者に対し，理解しがたいという異物感のようなものを感じている。こうした深い価値観のギャップと，リストラや成果主義の導入など企業社会の激変により，周りから孤立し，キレているのではないか。」
大野裕慶応大学教授（精神科医）：「根本の攻撃衝動は，他人など外側に向かって爆発するだけではなく，内側に向かってキレると，うつ病や自殺に至る。攻撃衝動の強さ自体は昔も今も変わらないのだろうが，社会的に余裕がなくなってきて，より頻繁にでやすくなっているのでは・・・」
ライフバランスマネジメント社渡部卓社長：「浅い友達から深い友達・家族まで，バランスのよい対人関係を作ることがキレの予防につながる。」
藤原智美（作家）：「キレる老人が増えた理由は，その背後に孤独感や社会へのストレスが蓄積されている。ストレスはすべて人間関係から生じ，別の人間関係で解消するしかない。キレるかどうかの境目は，グチを聞いてくれる人がいるかどうか。お年寄りを支える人間関係の輪が欠けていく中では，見出しにくい。」

雑誌では，『世界』2009年12月号の読者の投書が秀逸です。

資料13　『世界』2009年12月号「読者談話室」
63歳の宅急便の派遣労働者の投書「玄関先でのやりとりから」
派遣労働者として宅配サービスに従事している63歳の取手市在住のこの読者は，気に食わないといって急に態度を豹変させる若い独身者の対応について触れている。普段は普通の人が急にキレるこの現象はここ10年ぐらいの変化であると述べている。

以上のような日本社会の他者に対する不信感は，次のアンケート調査の結果にもよく表れているように思われます。

資料14　木村忠正「対人信頼関係の国際比較調査」(2005年)
なお，この調査の出典は，神野直彦『「分かち合い」の経済学』岩波新書，2010年である。
大学生を対象にして以下のような質問を行った。
①「人間は他人を信頼しているか」:「そうだ」と答えた大学生はフィンランドでは7割以上，日本では3割以下。
②「この社会では気をつけていないと誰かに利用されてしまう」:「そうだ」と答えた大学生はフィンランドでは2割，日本では8割。
③「ほとんどの人は基本的に善良で親切である」:「そうだ」と答えた大学生はフィンランドでは8割以上，日本では4割以下。

しかし，この間の特徴としては，3月11日を契機にして，私たち相互の間の社会的絆を回復し，連帯を強める方向への動きが強く表面に出てきたということだと思います。いくつか拾い上げてみますと，以下のような新聞や雑誌の記事が目につきました。

資料15　松原隆一郎「震災後に消費者心理どう変わるか」日経流通新聞，2011年4月6日
最近の若者に間に，他人とのつながりやコミュニケーションを重視する姿勢が強まっている。誰かと分かち合う，誰かとつながりを持つためにお金を使うことに重きを置く。今回の震災を期に，そんな意識が若い世代の間で一段と高まっている。価値の軸がコミュニケーションや誰かと共有する「場」への貢献にシフトしている。この世代は，義援金も被災者とつながるコミュニケーションの手段ととらえ，積極的に関わろうとする傾向がある。

資料16　湯浅誠「復旧と復興：生活の連続性」『世界』2011年6月号
他方，津波で流されなかったものもある。今回，私にとってもっとも印象的だったのは，被災地における地域コミュニティーの強さだった。

資料17　東日本震災後，結婚願望が強くなった　朝日新聞2011年5月15日付け
都市部の女性を中心に結婚相談所への照会が増加。未曾有の災害に直面して孤独感にさいなまれ，人との絆を持ちたいとの思いが広がったとの見方もある。

ところで，以上述べてきたような，社会を人間と人間の絆の回復により再構築していこうという方向は，ピアジェ派の知能構築論と極めて似通った議論ではないかと，最近気づきました。1996年にジュネーヴで開催されたピアジェ生誕100年記念シンポで，ピアジェの弟子であるブロンカールは，次のようなピアジェ心理学の解釈を示しました。

資料18　ブロンカールのピアジェ心理学解釈

前操作期に出現する記号機能（遅延模倣，ごっこあそび，描画，心像，言語）を知能という建築物を作る際の材料としてのレンガとみなせば，具体的操作期に出現するコミュニケーション機能は接着剤の役割をする。

私は，このブロンカールのピアジェ心理学の解釈を聞いて目から鱗が落ちたという感を抱いたのですが，ブロンカールは知能という建築物はコミュニケーションによってつくられるということを言っているのです。それはちょうど，崩壊へ向かっている社会が，人と人との絆の回復，コミュニケーションの回復により復興していくというイメージと重なります。その意味から，次のチャプマンの三項関係モデルの重要性も再認識されるのです。

資料19　Chapman,M. The epistemic triangle : Operative and communicative components of cognitive competence. In M.Chandler & M.Chapman (Eds.)Criteria for competence. Lawrence Erlbaum Associates, 1991, 209-228.

彼の言う「認識の三項関係」とは，図1に示されるようなものである。

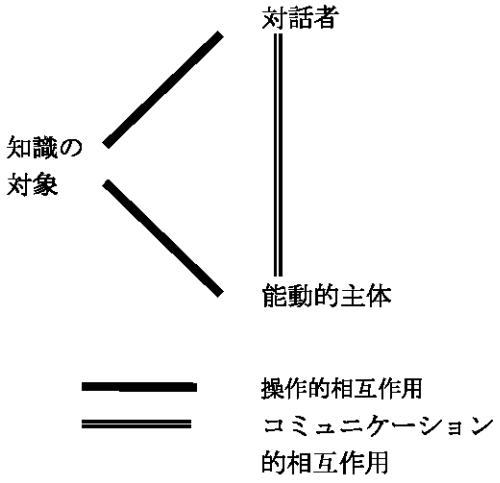


図1　認識の三項関係モデル

能動的主体と知識の対象の間，および対話者と知識の対象の間には操作的相互作用が存在するし，能動的主体と対話者との間にはコミュニケーション的相互作用が存在する。

ここで，チャップマンは「操作的」という言葉と，「コミュニケーション的」という言葉を次のように定義している。

①操作的相互作用：「操作的」とは，もともとはラテン語の"operari"に由来しており，力を及ぼすとか影響する，あるいは何かを産み出す，あるいは何らかの仕事をするという意味である。主体と対象の間の操作的相互作用に見られる関係は，主体と対象の間の非対称的な関係である。というのは，両者のそれぞれの関わり方は，お互いに相補い合う関係にはあっても根本的に異なっているからである。主体は，その結果を頭に思い描いた上で対象に働きかける。その働きかけの結果，初めの予想と一致していれば，その時点で対象は認識されるわけだが，一致していなければ，次には修正された新たな予想をともなって再度働きかけがなされる。このようなプロセスが繰り返されていき，認識が深められていく。

②コミュニケーション的相互作用：コミュニケートするというのは，ラテン語の"communicare"から来ており，コミュニケーション的相互作用は主体と主体の間あるいは対話者の間の対称的な関係である。すなわち，コミュニケーション過程への参加者は，いずれもが交互に同一の能動的役割をとることが可能である。この点が，非対称的関係である操作的相互作用とは異なるところである。さらに，コミュニケーション的相互作用には，感情と意図の共有がともなう。

③認識の三項関係モデルの内化（内面化）

さて，認識の三項関係をこのように定義した上で，次の段階が非常にユニークなのであるが，チャップマンはこの三項関係図式が七，八歳を境目にして全体としてまるごと内化されるとするのである。すなわち，ピアジェの知能の発達段階区分で言えば，前操作期から具体的操作期にかけての移行期において内化されるとするのである。ここで注目すべきは，ピアジェの具体的操作期をチャップマンは，次のように解釈しているとみなされる点である。すなわち，具体的操作期とは対象に向けられた主体の操作的行為および対話者に向けられた主体のコミュニケーション的行為がともに内化され，その内化された構造が均衡と相互協調の関係にある状態である。この根拠として，チャップマンは七，八歳頃に，知能の面においては，まだ不十分な形ではあるが，論理的な具体的操作的知能に移行すること，そして同時に自己中心的言語が減少することをあげている。前者は，操作的相互作用が内化した結果であるし，後者はコミュニケーション的相互作用が内化した結果である。

ここで注目しておかねばならないのは，チャップマンが操作的相互作用とコミュニケーション的相互作用の両者が同時に内化されねばならないと考えている点である。というのは，ピアジェの場合は操作的知能は言語によっては獲得されず，行為の内化およびその結果としてできあがった構造の相互協調によって獲得されるとみなされているのに対して，チャップマンはそれでは不十分であって，操作的知能が獲得されるためには言語も必要であることを強調するからである。そのためには，コミュニケーション的相互作用の内化と操作的相互作用の内化が同時に生ずることが必要である。コミュニケーション的相互作用が内化され，自己中心的言語を経て内言となることによって，内面化された状態においても認識の三項関係モデルが機能することを可能にするからである。

ところで，チャップマンは彼の図式が内化されるのを説明するのに最適のモデルとして，ヴィゴツキーの弟子であるガリペリンの知的行為の多段階形成理論を持ち出してくる。

ガリペリンの知的行為の多段階形成理論とは次の五段階から構成されている。①準備的段階（定位的基礎の形成），②外的，対象的行為の形成の段階，③外言の段階，④つぶやき（外言から内言への移行）の段階，⑤内言（内的行為）の段階である。

この五段階を，幾何の垂直という概念の形成過程によって具体的に説明してみると次のようになる。

①の段階では，行為の目的が知らされ，垂直という概念がどういうものであるかが説明され，次の段階（②の段階）で用いられる補助カードの使用方法や，定規や折れ尺の使い方が説明される。要するに，オリエンテーションがなされる段階である。

②の段階では，垂直かどうかを判別するための三枚の補助カード（それぞれのカードには次のように書いてある。Ⅰには「二本の直線があり，直角であれば垂直」，Ⅱには「二本の直線があり，直角でなければ垂直ではない」，Ⅲには「二本の直線があり直角かどうかわからなければ垂直か垂直でないかはわからない」。）の記述を参照しつつ，実際に定規や折れ尺を用いて外的行為として垂直概念を確かめてみる。

③の段階では，カード，定規，折れ尺は片づけられて学習者の目の前にはもはや存在しない。学習者は，垂直かどうかを判別する規則を口で言いながら行為をおこなう。

④の段階では，前の段階（③の段階）が正しくできるようになった後に，学習者は外言をつぶやきやひとりごとの水準へと移行させていく。

⑤の段階では，行為は外的行為としてはもはやおこなわれなくなり，内的な観念的なものとしてのみ内言によっておこなわれるようになる。

チャプマンによれば，ガリペリンの以上のような知的行為の多段階形成理論で一番大事なところは，段階②から段階③へと移るところである。すなわち，外的行為が言語の平面へと移されるという点である。それはなぜ重要かというと，段階②で主体は対象に対して直接に働きかけ，それによって対象の本質的な特徴や関係に注意を払うことが可能となる。すると，対象についてのイメージをつくり出すことが可能となる。そこで，次の段階で，それらのイメージと言語を結びつけることによりイメージは安定した堅固なイメージとして学習者の中に固定され，同時に対象の本質的な特質や関係についての意識や自覚がつくり出されるという。

また，この外言の段階で重要なことは，学習者が自分の目の前にいる他人（この場合は実験者という大人）にも聞こえる形で判断基準であるとか自分の考えなどを述べることであるが，そうすることによって他人にもわかる形で十分に展開された形で，正確に表現することが求められる。このように，他人とのコミュニケーションの必要性という社会的圧力の下で，学習者は対象の本質についての言語化をおこなうことにより，その後の段階④，段階⑤で形成されていく意識に社会性がもたらされることになる。

(3) 活動理論の新定義

このような中で，平凡社の『新版　心理学事典』(2012年 4 月刊行予定)の「活動理論」という項目を執筆するようにという要請が私に寄せられました。私は，執筆に当たって，この間のわが国における人間論に関する議論の動向，および，私が，ここ 30 年間にわたって行ってきたヴィゴツキー理論とピアジェ理論をめぐる国際的な研究動向に関する私自身の立場を踏まえて，独自の新しい定義を与えねばならないと思い立ちました。とくに，ピアジェ派の一部の人たちや，チャプマンたちの目指す，ヴィゴツキー派とピアジェ派の統合を目指す動きと重なりあうような，新しい独自の定義を「活動理論」に対して与えられないかと考えました。それは，大きく言えば，活動とコミュニケーションとの統合を目指す独自の視点からの活動理論の新たな定義づけです。芝田進午先生の言葉を借りれば，労働の技術的過程と組織的過程との統合という視点からの新たな定義づけです。

活動理論はもともと，マルクスの労働概念を出発点として主にソ連を中心にして心理学の中に入ってきた考え方ですが，それがソ連以外の国々へと展開していく中でコミュニケーションの要素を大きく取り入れた新たな概念へと変化･進化してきていると思います。このような思いから私が書き下ろした活動理論の定義を最後に紹介しておきます。この定義は，今後 20 年間ぐらいのわが国の活動理論の概念規定になると思います。20 年後に三たび改訂されることがあるとすれば，また新たな視点を加えた新定義が出てくることを期待しています。

資料 20　かつどうりろん　活動理論　Activity Theory
（平凡社『新版　心理学事典』2012 年刊行予定）

[活動理論の発生]

活動理論はその源流を 1917 年のロシア革命後に成立した旧ソ連の文化歴史学派(ヴィゴツキーVygotsky,L.S.、ルリヤ Luria,A.R.、レオンチェフ Leont'ev,A.N.など)に求められる。この 3 名は、文化歴史学派のトロイカと呼ばれているが、最年長者であったヴィゴツキーの名前を冠してこのグループをヴィゴツキー学派と呼んでもいいであろう。ロシア革命後の百家争鳴のさまざまな思想潮流のルツボの中から生まれたいわば革命の落とし子でもある。そのために、マルクス主義と心理学の統合をめざした理論であるという色彩が濃厚である。

そもそも、活動 activity というのは人間と自然との間の物質代謝、すなわち、人間が自然に対して働きかけ、その反作用として自然から人間が働きかけられるという側面を表した言葉であった。これは、当時、隆盛を極めていた行動主義心理学が外部環境からの刺激により人間が受動的に影響されるという側面を強調していた点と対極をなすような人間観であり、人間の外部世界に対する能動性を強調したことに意味がある。

このような視点から、活動理論は活動の軸の上で心理過程が展開するという側面に重心を置いていた。たとえば、不随意的記憶 involuntary memory という活動と記憶の関係を研究したテーマがあるが、そこでは記憶というのは活動するなかで不随意的に生起するという点が強調された。

ところが、このような人間と外部世界との相互作用の側面のみに集中していた活動理論が変化してきたのはロモフ Lomov,B.F.とレオンチェフとの論争以降である。ロモフは、それまでの心理学に特徴的であった人間と外部世界の関係のみに注目するという立場を、一面的であると批判して、人間と人間の関係、すなわちコミュニケーション communication の側面も重視する必要性を強調した。われわれ人間は、日常生活のほとんどの場合において単独で、孤立して活動しているのではなくて、他者との協同の中で活動している。そうすると、その中で生ずる心理過程も他者との協同という側面が必然的に入り込まざるを得ない。

もともと、ヴィゴツキーも、人間の文化的行動様式には二つの側面、すなわち、人間と自然との側面(活動)と人間と人間との側面（コミュニケーション）があると考えていたし、レオンチェフも人間と世界との結びつきは他の人々とのコミュニケーションにより媒介されると考えていた。だが、初期の段階では、このコミュニケーションの側面がややもすれば軽視されていた活動理論において、コミュニケーションにスポットライトが当てられたことは以後の活動理論の展開に新たな広がりをもたらすことになった。なぜかというと、活動に加えて、コミュニケーションを織り込むことにより、共同体 community という組織や集団を心理過程が形成される基盤として据えつけることを可能にしたからである。

[活動理論の展開]

まず、アメリカでは、以前からブルナーBruner,J.たちによって、ヴィゴツキー派の心理学は注目されていたのであるが、ソ連に留学したワーチ Wertsch,J.V.やコール Cole,M.らによって新ヴィゴツキー派が成立することにな

る。

ワーチは特にコミュニケーションの側面に注目してヴィゴツキー派心理学を新たに展開した。その中では、科学的概念と生活的概念の織りあわせとしての対話型授業とか、新たな思考の発生装置としての対話などが追求された。

また、コールは活動とコミュニケーションからなる共同体の中で学習が行われる様子を研究した。個人の学習活動がたんに個人の頭の中だけで行われるのではなく、その個人をとりまく、学習集団のあり方とか、学習施設の経営方針、その所在地の地域の社会的・風土的環境、さらに大きくはその地方、その国の社会的あり方や教育政策、経済状態などによって、個人の学習活動も規定されていることを明らかにした。それは、庭としての文化culture as garden モデルとして表されている。

また、同じくアメリカの新ヴィゴツキー派に属するロゴフ Rogoff,B.は共同体型(参加型)学習モデルを提唱している。コールの場合と同様に個人の学習活動は集団の中で営まれることを、組織のレベル、個人と個人の間のレベル、個人のレベルの三水準ごとに明らかにした。それは、徒弟制、導かれながらの参加、アプロプリエイション appropriation(他人の所有物を自分のものにすること)である。

さらに、アメリカではレイブ Lave,J.とウェンガーWenger,E.(1991)の正統的周辺参加 legitimate peripheral participation という概念も重要である。人間が生まれてから一人前の大人になるためには共同体という社会の存在が必須であることを明らかにしたからである。この視点は、わが国における昨今のフリーター問題を考える際にもきわめて重要な視点になっている。正統的周辺参加が明らかにした教育法は、初めは簡単なあまり重要でない仕事から、徐々に重要な仕事へと移行していって最終的には一人ですべてをこなすことが可能な一人前の労働者として成長していくプロセスを描いているのだが、同時にそのプロセスは一人前の大人として人格的にも成長していくプロセスでもある。フリーターとか非正規労働者として、細切れの仕事を与えられるだけで使い捨てにされるようなプロセスとは対極の世界を表しているのである。

フィンランドでは、エンゲストローム Engeström,Y.が注目される。以前から、北欧は活動理論の影響の強い地域であったが、なかでもエンゲストロームはレオンチェフの弟子を自認するだけあって、活動理論の原型を強く感じさせるモデルを提唱している。エンゲストロームのモデルは、もともとヴィゴツキーが刺激と反応のＳ－Ｒ理論図式へ媒介項として記号 sign を挿入して、その記号を媒介として人間は外部刺激へと働きかけるとしたＳ－Ｘ－Ｒ図式を拡張したものである。彼は、媒介項として道具 tool と共同体を挿入することによって資本主義社会に生活し労働する人間の問題を説明しうるモデルを提出したといえる。

さらに、ピアジェ派(ジュネーブ学派)と活動理論とのかかわりも指摘しておきたい。ピアジェ派の一部の人たちは、ヴィゴツキーの最近接発達領域という概念とピアジェの知能の発達論を統合する試みを行ってきた。たとえば、ペレ・クレルモン Perret-Clermon,A.N.(1980)はピアジェの言うところの保存がコミュニケーションを介することによって、それまで獲得されていなかった児童に獲得されることを明らかにした。

このようなピアジェ派と活動理論、ヴィゴツキー派の統合というテーマに関して、チャプマン Chapman,M.(1991)の認識の三項関係モデルを落とすわけにはいかない。彼は、能動的主体と知識の対象との関係(操作的相互作用)と能動的主体と対話者との関係（コミュニケーション的相互作用）という三項図式が 7、8 歳頃に子どもの内面に形成されることにより、知能の発達段階の前操作期から具体的操作期への以降が行われると考えたのである。

以上のように、旧ソ連において 20 世紀の初めに誕生した活動理論は、活動の軸に加えてコミュニケーションの軸を設定することによって、旧ソ連を飛び出して、西側世界へとその後大きく展開することになった。それは、アメリカの認知心理学やジュネーブ学派（ピアジェ心理学）までも包含する広がりを見せているのである。

[高取憲一郎]

みていただいたように，この概念規定は，従来の活動理論の概念規定とは異なり，コミュニケーションの役割に大きなウエイトを割いているところに特徴があります。そして，ヴィゴツキー心理学とピアジェ心理学をコミュニケーションを媒介としながら統合していくという視点を示しているところが斬新なところではないかと思います。

（注）本稿は，2011 年度免許更新講習における講義原稿を基に，大幅な組み替え，加筆，修正を加えたものである。